

Hagiwara Sakutarou

×

Ikuta Shungetsu

【参考】

『生田春月への旅』

『郷土出身文学者シリーズ 2 生田春月』

春月と萩原朔太郎が初めて顔を合わせたのは大正8年、『日本詩集』刊行記念会の委員に選出された時ですが、本格的な交友を始めたのは大正11年、朔太郎の詩集『新しき欲情』の刊行後、反響のない中で、春月が熱心に支持したことがきっかけと考えられています。二人の生い立ちは対照的でしたが、哲学者ニーチエの思想精神に影響を受けたことが共通しており、詩作に対する気質が似ていました。内気で孤独なことが多かった春月にとって、朔太郎は盟友であり心の支えでした。

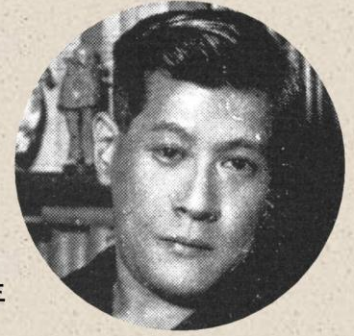
昭和5年、春月が自殺したことを新聞が報じた翌日、朔太郎はその死を「芥川（龍之介）の時以上だ」と語っており、その驚きと悲しみは相当なものでした。その後も朔太郎は自身の評論や随筆で春月への想いを綴り、毎年5月の春月忌にも律儀に顔を出していたことが確認されています。

はぎ わら さく た ろ う
萩原朔太郎 と

いく た しゅん げつ
生田春月



いく た しゅん げつ
生田春月



詩人・翻訳家 明治 25 (1892) 年～昭和 5 (1930) 年

会見郡米子町字道笑町（米子市道笑町）に生まれる。本名清平（きよひら）。

生家の没落により高等教育を受けられない中、独学で語学・文学修業を行う。新潮社の経営する文章学院の一員となったことから作品の出版に結びつき、特に『靈魂の秋』『感傷の春』の二部作は大きな反響を得た。また自伝的小説『相寄る魂』にはふるさと米子の情景が美しく描かれている。

翻訳家としての業績も多く、ハイネ（1797 年～1856 年）を日本に紹介した第一人者としても知られている。

◆代表作『相寄る魂』『ハイネ全集 全 3 卷（翻訳）』『靈魂の秋』『感傷の春』

【肖像出典】「生田春月全集 8 卷」生田春月／著



はぎ わら さく た ろう
萩原朔太郎

詩人 明治 19 (1886) 年～昭和 17 (1942) 年

群馬県に開業医の子として生まれる。

前橋中学時代より短歌を始め、『明星』に作品を掲載する。大学進学を断念するが、室生犀星(むろうさいせい) (1889 年～1962 年) と知り合い、詩誌『卓上噴水』『感情』などを創刊。大正 6 年 (1917 年) には初の詩集『月に吠える』を自費出版し、口語詩を確立した。

晩年は与謝蕪村(よさぶそん) (1716 年～1784 年) などの詩論を発表し、平安朝文化への懐古的憧憬と郷愁を句から読み取っている。

◆代表作『月に吠える』『青猫』『郷愁の詩人 与謝蕪村』

【肖像出典】群像日本の作家 10「萩原朔太郎」佐々木幹郎／他著 【参考】京都近代文学事典』

Masaoka Shiki

×

Tanaka Kanrou

【参考】

『辺境に埋れた放浪の俳・歌人 田中寒樓』

『郷土出身文学者シリーズ 3 田中寒樓』

寒樓が俳句を始めたのは明治30年、阪本四方太と知り合い、同年発足した句会「卯の花会」の会員になったことがきっかけでした。

寒樓は四方太の指導を受けると同時に、正岡子規が選者を務める新聞『日本』への投稿を勧められ、投句を始めました。すると明治32年の俳誌『ホトトギス』で、俳句界で頭角を現した者の名前が発表された際、子規が「因幡に於いて寒樓、(太中)紫溟郎」とたたえたのです。この一件により、寒樓の名が全国に知れ渡りました。10月、寒樓は四方太に連れられて初めて上京し、憧れの子規を訪問します。会えたのは一日でしたが、直接会えたことが自信につながりました。

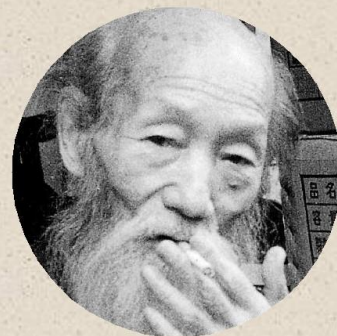
明治35年に子規は亡くなりますが、翌年刊行された選句集『春夏秋冬』に寒樓の作品が38句選ばれました。この多さは異例であり、子規の寒樓に対する評価の高さがうかがえます。

まさ おか し き
正 岡 子 規



た な か かん ろう
田 中 寒 樓

た なか かん ろう
田 中 寒 樓



俳人 明治 10 (1877) 年～昭和 45 (1970) 年

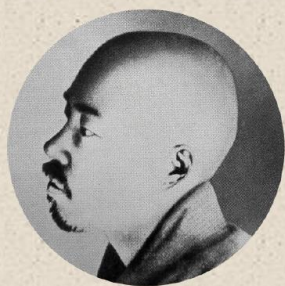
八上郡小畑村（鳥取市河原町小畑）に生まれる。本名國三郎。

明治 32 年 (1899 年) 鳥取一中在学中より正岡子規 (1867 年～1902 年) の俳句革新運動に共鳴し、句作を始める。新聞『日本』や俳誌『ホトトギス』に投稿を行い、子規に「因幡に寒樓あり」と絶賛された。

後年は、天地との一体を説く“寒樓哲学”と称された独自の哲学的人生を歩み、俳句行脚を兼ね西日本各地を遍歴した。

◆代表作『霜』『弓張岳 寒樓歌集』『揮毫語録 寒樓手帖』

【肖像出典】「寒樓の俳句」田中寒樓研究会／編



まさ おか し き
正 岡 子 規

俳人・歌人 慶応 3 (1867) 年～明治 35 (1902) 年

伊予国（現在の愛媛県）に生まれる。本名常規(つねのり)。

明治 25 年 (1892 年) 東京帝国大学を退学後、新聞『日本』に入社。翌年から同紙に俳句の投稿を始める。俳句の革新に取り組む。たびたび喀血し病床につくことが多かったが、俳句・短歌の革新に努め、多くの門下生を育てた。

明治 30 年 (1897 年) には俳句雑誌『ホトトギス』を松山で創刊。近代俳句に大きな影響を与え、功績を残した。

◆代表作『歌よみに与ふる書』『墨汁一滴』

◆代表句「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」「松山や秋より高き天守閣」

【肖像出典】「Century books 人と作品 2 正岡子規」福田清人・前田登美／編著【参考】『四国近代文学事典』